

生涯学習町づくり

前 田 政 男

(北海道喜茂別町長)

まえがき

昭和56年2月、北海道教育委員会を退職して喜茂別町教育委員会教育長に就任以来、昨年7月町長に就任するまでの約7年余、私は「まちぐるみの生涯学習」推進を教育行政の基本柱として進めてきた。

その結果は、学校においては「生涯学習の基盤づくりとしての学校教育の推進」を、また、社会教育においては「生涯教育の充実を基本とする社会教育の推進」の2つを具体化し「まちぐるみの生涯学習」推進に努めることができた。

このような経過を辿るうちに町民は次第に、「わが町は生涯学習推進の町」という意識にめざめ生涯学習手帖などを片手に各種の学習会に参加するようになった。また、特に、生涯教育セミナーは町民の学習要求に合致することが多く成果があったと思われる。

しかし、町長に就任してみて「まちぐるみの生涯学習」もいくつかの課題があることに気がついた。つまり、教育長として進めてきた生涯学習は町民の関心事にはなっていたものの、どうしても教育関係者や表面的な理解に終わっていたような気がする。

26 特集 生涯学習社会の総合診断

特に町民にとっては、生活に直結する一般行政に関心があっても、およそ教育ということばには、格別の問題でも起きない限りそれ程の関心を示さないということである。

その背景となっているのは、町民一人ひとりの「生涯学習」に対する認識の問題があると思う。即ち、生涯学習とはあくまでも教育それ自体の問題であり一般行政とは格別かわりないという考えが根底にあるものと思われる。

そこで、本稿では、私が教育長時代に取り組んだ生涯学習の推進を回顧、反省しつつ、それでは「生涯学習町づくり」に町長としてどのように取り組み、また進めようとしているか述べてみたいものと思う。

1. 生涯学習への取り組み

昭和56年3月、私は就任直後の定例議会において、教育行政執行方針の中で、「町民が生涯を通じて学習できる体制の確立」をうちだし、本格的な生涯教育推進を教育行政の基本柱とした。

これらの方向は、昭和57年度になってからはいっそう明確となり、学校教育においては「生涯学習の基盤づくり」を柱とし、社会教育においては、前年の昭和56年12月に町社会教育委員から答申された「喜茂別町における生涯教育の推進方策について」を尊重し、生涯教育の充実を基本として多様な学習機会の確保に努めるとともに、明るく豊かな町づくりに役立つ諸般の教育活動を進めるため生涯教育の体制づくりに努めることとした。

2. 生涯学習に関する住民意識と推進への動き

昭和54年は本町にとって大変悲しい事件が発生している。

それは、森林組合をめぐる町費の不正流用事件であり、元利8億6000万円にも及ぶ金額が議会の承認を得ぬまま金融機関から融資をうけ、それが

当時の収入役の手を通し町役場の金庫から森林組合に渡し、借りた側の責任者が失踪してしまい、また、直接の責任者だった町長は、病死するという前代未聞の事件となった。この後遺症は今日なお残っているが、経済的なことは勿論、町民の行政に対する不信、なканずく町理事者や議会に対する信用失墜ははかり知れないものがあつたと思われる。

私は、このような状況の中、町が財政健全化を進めつつある時教育長として招請されたものであるが、着任以前に議会に対するリコールさわぎがあつたこともきいた。(事件の後遺症というべきか、その後昭和59年は地域開発問題にからみ当時の町長は、任期半ばでリコールされ、そのあとの町長についても昨年7月、一期の務めで勇退した。)

就任後、私は町社会教育委員と話し合い、町民の意識調査を実施、調査表の余白に自由な意見や感想を書いてもらった。

その結果は、町民の町政に対する不信感、不安、また、喜茂別という地域に対する嫌悪感といったものが老若男女を問わずだされておられ、今でも大きな衝撃として印象に残っている。

しかし、そのような状況にもかかわらず、救われたのは実に全体の75.2%が生涯にわたる学習に意欲を示し、特に、女性は80.7%、また年代別では20代、30代、40代と意欲的であつたことだ。ただ、50代、60代は低くなっていることがわかつた。

以上のような調査を社会教育委員が手を使い足を使って実施したことは意義深いものであつた。また、この年7月に、町民の具体的な生涯教育を推進するため「喜茂別町生涯教育推進方策研究協議会」が組織され各種調査研究や活動に必要な施策研究、生涯学習手帖の活用と生涯教育カルテの作成及び各種団体の連携や一体化等を協議し本町の生涯教育を推進する中心母体となつた。

昭和58・59年は生涯学習手帖や生涯教育カルテの活用等生涯教育の啓発的な活動が進められたが生涯学習手帖については昭和57年に町民（成人・青年）の約1割を対象に実験的試行をし反省会や座談会を重ねながら翌58

年に現在の手帖がつくられたものである。

3. 生涯学習の実践

生涯学習を実践するにあたっては、それまでの経過をふまえながら町民への定着や理解の状況をたしかめる意味をも含め昭和62年7月、再び生涯教育に関する意識調査を行うこととした。そのうちの一部をひろってみると、全体の78.8%が「生きがい」を感じている。その中味としては、家庭や子供の教育が26.8%で、30代、40代、50代が圧倒的に多く、次いで、全世代が仕事25.4%と答えている。

また、30代以上の13.4%が趣味・娯楽と答え余暇を自分のものにしたい意向がみられた。さらに、勉強、教養が8.9%で何らかの形で学習したいと考えていた。

生涯学習を必要とする理由については、職業や家庭生活などに必要な知識、機能などを高めるため26.6%、社会の進歩や変化につ遅れないようにするため21.3%、老後の生活を豊かにするため27.2%などとなっている。

これらのことがらは、殆んど、どの市町村にも共通するものと思われるが、本町が昭和56年に実施した調査と比較すると微妙に変化していることがわかるし、それも生涯学習についての認識や理解が深まってきていることがわかる。いずれにしても、この調査の結果は生涯学習推進の環境づくりをしていく上で重要な背景とすることができた。

(1) 生涯学習手帖の利用

住民が学習に参加し、あるいは自ら学習する過程の中で、学校教育の場合には定められた時期に学習を終えると修了証書や卒業証書が与えられる。社会教育においても、これらの証書に代るものとして勉強した証しがあれば学ぶ人々の意欲の向上に役立つという住民からの素朴な要望がだされていた。

これは、生涯学習は学歴社会を乗り越えるものという視点からは少々矛

盾するようだが、学習の記録の積上げというふうになればそれなりの意味があると思う。また、町民の80%近くが学習活動への参加を望んでいるというアンケートの結果等から、生涯教育推進方策研究会(社会教育委員、体育指導委員、社会教育関係団体代表者により構成)が中心になって検討した結果生涯学習手帖が考案された。手帖は、その必要性の効果を模索するため1年間実験試行し、町民の要望をとり入れて改善、種々の検討を加え、昭和58年から全町民(児童を除く)が使用するところとなったことは先に述べたとおりである。

町民が生涯学習手帖を利用するようになってから既に7年になるが、そもそも、この手帖は町民の要望をうけ入れて作成したものであり、あくまでも使用を希望する者のみが利用するものであって、この手帖を使わなければ学習に参加できないとか、あるいは生涯学習とはいわないなどというものでなく、住民一人ひとりが自分の学習メモとしたり、場合によっては備忘録代りにするなどして少しでも多くの人に活用してもらい生涯学習の雰囲気親しんでもらおうという趣旨のものである。

したがって、各種の講座や学習の機会に、いつでも利用できるよう手帖を用意しておくことによって、かなり多くの人が使うようになった。私などもすでに20冊近くの生涯学習手帖を使っており鞆の中には大抵1冊入れておくこととしている。

(2) 生涯教育セミナーの開設

昭和61年5月、生涯教育セミナー企画運営委員会を設置したが、そのねらいは、受講者の多種多様な生活課題や住民の学習要求に対応し、自ら学習し解決する学習態度の伸長と住民の日常生活、豊かなライフステージの創造に向けての生涯学習活動について、学習者の立場で企画から展開までをとり進めることにある。

委員会は①地域の活性化専門小委員会、②健康・福祉増進専門小委員会、③生活・文化向上専門小委員会の学習領域毎の3プロジェクト委員会とそれを統合する企画運営委員会、そして事務局によって組織だてられており、

30 特集 生涯学習社会の総合診断

町内の各種行政機関並びに学習領域別関係団体等の代表者及び学識経験者で構成されている。また、これら委員によって講座が学習要求に合致したものとなるよう、さらには、自ら学ぼうとする仲間が増えていくことを願いつつ精力的に企画運営してきている。

この特徴は、セミナーの企画や講師の選定、開催当日の具体的な運営は教育委員会が一切表に出ないでセミナー企画運営委員会が当たっていることである。即ち、町内の関係機関、団体が丸丸となってセミナーを実施し生

生涯教育セミナー「きもべつ」企画運営委員

(S62) 順 不 同

	氏 名	役 職 名
地域の活性化等 専門小委員会	柳 川 光	学識経験者
	千 葉 真 吾	商工会長
	三 浦 信 夫	社会教育委員長
	◎ 武 重 芳 徳	連合町内会長
	輪 島 忠 克	町役場企画課長
	表 谷 政 枝	市街婦人会長
	山 田 雄 一	農協青年部長
健康・福祉増進 専門小委員会	越後谷 忠 夫	福寿会長
	押 切 寿 和	町福祉協議会事務局長
	松 井 二 郎	町体育指導委員長
	松 本 椽 隼	町体育指導委員副委員長
	石 川 守 之	町役場民生課長
	○ 館 内 康 夫	町体育協会副会長
	小松平 博 子	若妻会長
生活・文化向上 専門小委員会	佐 藤 千子三良	若返り学級運営委員長
	○ 細 田 時 友	町校長会長
	木 村 繁	町観光協会会長
	進 藤 博 邦	町役場産業課長
	佐 藤 コ ヨ	町婦連会長
	村 上 誠	町文化団体協議会長
	菊 地 利 憲	商工青年部長

昭和62年度

生涯教育セミナー「きもべつ」開設ご案内

町民の皆さまのご協力で本町の生涯学習は次第に充実してきております。ことしは、下記のような学習の場を設定いたしましたので、多数のご参加をお待ちしております。

「テーマ」生涯を通じ生きがいある、心豊かな町づくりをめざして
＝地場産業の育成と充実・地域社会と生活文化の創造＝

*学習方法

道内の著名な講師により講演・講義・話し合いをしながら、それぞれの分野の学習をします。

*学習対象

どなたでも受講できます。

受講申込その他、不明な点がありましたら下記までご連絡下さい。

喜茂別町教育委員会
社会教育係
33-2203

回	月	学 習 テ ー マ	学 習 の ね ら い
1	5	生涯学習の進め方	今日、生涯学習の必要性が強くさげられているなかで、生涯にわたって学び続けるための具体的な学習方法を学ぶ。
2	6	町づくりのビジョン	来るべき21世紀を展望し、魅力ある住みよい街づくりを進めるために、喜茂別町の将来を語る。
3	7	地域社会の充実をめざして	過疎を逆手にとり、喜茂別町の地域をもう一度見つめ直し、喜茂別町でしかないことをさぐる。
4	8	これからの商業経営を考える	人口減少等による購買力の低下が著しい情勢の中で商業経営の効率化をはかるための方策をさぐる。
5	8	余暇利用法…シェーブアップを考える	「いつでも」・「だれでも」・「どこでも」できる美と健康を創る運動をしてみませんか。
6	9	喜茂別町の観光開発を考える	地理的条件、さらに、四季にわたりすばらしい自然環境のなかで、喜茂別町の観光開発はどうあるべきかを語る。
7	10	青少年・成人の社会参加を考える	明るく住みよい町づくりのために地域住民は、今、何をすべきかを考え、あわせて、各地の社会参加活動の事例を紹介する。
8	11	長寿社会と生活設計 保険制度のしくみ	人生80年代の到来、町民一人ひとりが豊かでゆとりある生活を送るために保険制度のしくみを学ぶ。
9	11	くらしの知恵あれこれ	豊かでゆとりある生活を送るために、地域住民の生活意識を見直し、くらしの知恵を学ぶ。
10	12	これからの農業経営を考える	きびしい農業情勢の中で、今後、喜茂別町の農業経営はどうあるべきかをさぐる。
11	1	北国の暮らしと文化 …地域と文化…	北国の生活・文化を見直し、地域文化への関心を高め、さらに、地域住民の生活意識や学習要求を確立する。
12	2	北海道の産業・経済の 展望…喜茂別町の地 域産業を考える	後志・北海道の産業・経済の動向をさぐり、喜茂別町の地場産業が、今後どうあるべきかを語る。

*社会通信教育

(文部省認定)

資格・認定が取得できます

事 務	経営・コンピューター・法律・経理 財務・速記・販売 技術・印刷 出版(校正・レタリング)など
技 術	電気・家庭電器(組立・修理)・機械・テレビ・建築・製図・測量 無線・農業など
生活・教育	服飾(洋裁・編物ほか)・保育・書道・語学(英語・仏語)・ファッション・料理・音楽など

主 催 喜 茂 別 町 教 育 委 員 会
主 管 生涯教育セミナー企画運営委員会
後 援 喜茂別町・喜茂別町文化団体協議会・喜茂別町体育団体連絡協議会・喜茂別町社会福祉協議会・喜茂別町婦人団体連絡協議会・青年会議所・商工青年部・農協青年部・4日クラブ

生涯学習に関する町民の意識を高めると共に、学習要求に応じた講座を開催しているものである。

さて、生涯教育セミナーの開設は当然のことながら町民の学習要求に応じて企画し実施されるものであるが、これまでの実施の結果としては、参加対象の問題が指摘されるものと思う。少々極端な表現をすれば開設の当初は、いかにして多くの人を集めるかが眼目となり学校の管理職や一部の一般教員、また、比較的集りやすい高齢者あるいは各種団体の代表者などが受講者の大半を占めており一般成人、婦人、青年層が少なかったこと、もっと大事なことは、町づくりをめざす諸講座には一般行政を担う役場の管理職などが積極的に参加することが大切な筈であるが、実態はセミナーの企画運営委員会に参加しているものだけにとどまり、課長会議などいくら教育長がよびかけても殆んど参加しないという状況が続いた。これは結局、当時、生涯学習というものが一般行政とは全く別なものという認識が根底にあったからだと思う。

その意味で一般行政とのかかわりの中で一体となって生涯学習町づくりを進めることの工夫が求められるものと思うし、市町村長に対する教育関係者の働きかけと共に研修機関等において実践研究の場があってよいと思う。

もう一つの反省は、本来、生涯教育セミナー開設の趣旨は町民の学習要求に応ずることは勿論、町の活性化、発展に役立つ学習内容であることを願うものであり、その限りでは不特定多数を対象とする一般的な講演会とは趣きを異にするものであり、ある限られた人数で濃密にかつ継続的に講座を開設し、学習し、やがてそれが町民自身の生活向上につながり、また、町づくりの一助とするものでなければならず、年数回程度の講座開設に終っては、決して本来の目的を達成することとはならないものであり、その点についての充実がのぞまれる。また、特に生涯学習の理解を深め協力を得るという意味からは多数の人々が参加するような講座開設も当然必要であるが、やはり目的達成に近づくという全体のバランスを考慮に入れなが

ら計画を樹てていくことは大切である。

(3) 家庭・学校・地域が一体となって取り組む地域活動

町民が生涯にわたって学ぶためには、学び続ける意欲、学ぶ喜び、方法、態度を人間性を培う基礎として幼少期から身につけることが大切であり、この実践にあたっては、家庭、学校、社会を通じて一貫するものでなければならない。

したがって、生涯教育推進には、「生涯学習の基盤づくり」としての学校教育の推進を重点として位置づけ、地域の中の学校として、地域がもつ特性を生かして、住民の主体的、積極的な学習への意欲、態度を培うことが重要であり、家庭、学校、社会が相互に理解を深め合いながら、共通の課題認識をもち、各々の役割の上になんて、実践目標の具現化をめざして協力体制をつくり、着実な実践を積み重ねていくことが肝要である。

鈴川集会の紹介

鈴川地区は、本町より5キロメートル余に位置し、国道230号線から分岐し、千歳、苫小牧に至る国道276号線に沿って、山峡の地形にある戸数約80余戸の純農村地帯で、開拓以来80有余年の歴史をもつ地域であり、主産物は、アスパラガス、種子馬鈴薯、ビートなどである。

鈴川小学校校歌の一節に「名も鈴川の美（うま）し地に」とあるが、開拓以来、数々の苦節の時代を乗り越えて産業、交通、自治、教育等に堅実な生活基盤を築いてきている。

しかし、情報化社会を迎え、物質の豊かさ、平均寿命の伸びと高齢化社会、人口の過疎化の進行等様々な課題をかかえており、このような現状を考えると、鈴川の地域は、これまでの生活基盤の上に、文化的、精神的豊かさの充実が必要と思われる。したがって、地域住民は歴史を大切に、先人の努力、創意工夫、熱意、理想など、開拓精神を受け継ぎつつ未来社会をめざし、その目標を「教育と文化の香り高い町、鈴川の創造」とし、昭和58年度に鈴川集会基本構想を樹立、第1回鈴川集会を開催してより提

案，検討を進め今日に至っている。その中心課題は，地域の歴史的発展に重要な後継者たる「青少年の健全育成」を軸にし，各々の年代が立派に充実した生き方をしていくことに期待している。また，その実践の領域は，家庭，学校，社会の全領域にわたり各々の鈴川集會を企画し，時間をかけて，話し合いを進め，総合的に活動を調整しながら，進めていくこととしている。

〈実践内容の概要〉

表 1 鈴川集會推進構造図

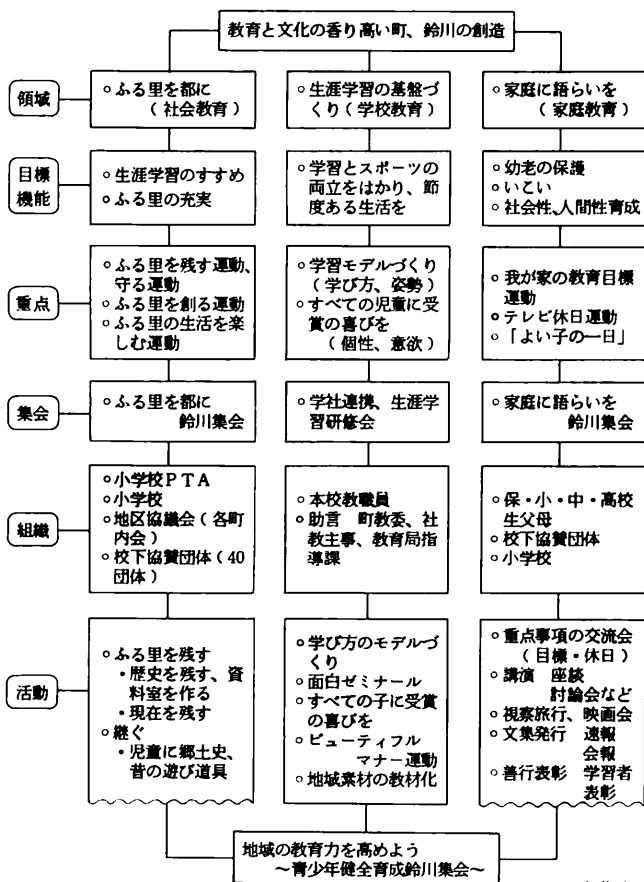


表2 鈴川集會年次計画

領域 年度	共 通	社 会 教 育	学 校 教 育	家 庭 教 育	備 考
58	<ul style="list-style-type: none"> ●鈴川集會基本構想樹立 ●第1回鈴川集會開催（約50名参加） 	<ul style="list-style-type: none"> ●各種団体、役職調査 ●文集「ななかまど」の工夫 ●生涯学習手帖の活用 ●読書活動等各団体の活動活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ●鈴川小教育5か年計画確立 ●社教主事と生涯学習研修会（第1回） ●面白ゼミナール第1回「鈴川の歴史」 	<ul style="list-style-type: none"> ●研修、講演会参加 ●大会参加 	<ul style="list-style-type: none"> ●構想検討 ・町教育委員 ・町文教委員 ・局主幹 ・管内座談会 ・町内校長、教頭会
59	<ul style="list-style-type: none"> ●鈴川集會年次計画確立 ●ハンドブックの検討（発行） ●第2回鈴川集會開催 ●活動の記録化 	<ul style="list-style-type: none"> ●「ふる里を都に」鈴川集會 ・各団体紹介、役職一覧表 ・各団体活動の活性化懇談会 	<ul style="list-style-type: none"> ●教育目標の見直し ②社教主事と生涯学習研修会（第2回） ●面白ゼミナール ●地域素材の教材化 	<ul style="list-style-type: none"> ●「我が家の教育目標」づくり ・教育目標の作成と具体化計画 ・「テレビ休日」と家族の対話 ●幼小中高生父母会「家庭に語らいを鈴川集會」 ・企画 	<ul style="list-style-type: none"> ●冊子 ・集會ハンドブック
60	<ul style="list-style-type: none"> ●集會ハンドブックの発行 ●第3回鈴川集會 	<ul style="list-style-type: none"> ●「ふる里…」 ●各団体の活動紹介ハンドブック発行 ●各団体の懇談会 	<ul style="list-style-type: none"> ●町内複式教育研究大会 ●面白ゼミナール ●地域素材の教材化 	<ul style="list-style-type: none"> ●「家庭に語らいを鈴川集會」 ・実践交流 ●家庭教育研究会 	<ul style="list-style-type: none"> ●冊子 ・各団体
61	<ul style="list-style-type: none"> ●第4回鈴川集會 	<ul style="list-style-type: none"> ●各団体の交流懇談会 	<ul style="list-style-type: none"> ●面白ゼミナール ●地域素材の教材化 	<ul style="list-style-type: none"> ●「家庭に…」 ●家庭教育研修会 	
62	<ul style="list-style-type: none"> ●第5回鈴川集會 	<ul style="list-style-type: none"> ●各団体の交流懇談会 ●開校80周年の構想 	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の教育力の活用 ●体験活動の推進 ●面白ゼミナール、地域素材の教材化 	<ul style="list-style-type: none"> ●「家庭に…」 ●家庭教育研修会 	<ul style="list-style-type: none"> ●冊子 ・学校教育
63	<ul style="list-style-type: none"> ●開校80周年 ●第6回鈴川集會 	<ul style="list-style-type: none"> ●回顧展の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ●開校80周年記念作品 ●同記念行事 	<ul style="list-style-type: none"> ●実践事例集 	<ul style="list-style-type: none"> ●出版 ・80周年記念誌
64	<ul style="list-style-type: none"> ●7か年の取り組みを発行 ●第7回鈴川集會・1次のまとめ、2次の企画 	<ul style="list-style-type: none"> ●各団体の交流懇談会 	<ul style="list-style-type: none"> ●面白ゼミナール ●地域素材の教材化 	<ul style="list-style-type: none"> ●実践事例集の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ●出版 ・図書

(1) ふる里を都に鈴川集會（社会教育）

ふる里を残す、創る、楽しむ運動を進め、ふる里の充実を目指して、住民の意欲と結びつき、活力のある地域を住民とともに築いていく。

① 運動を進める組織と活動

36 特集 生涯学習社会の総合診断

△地域連絡協議会

各町内会を統合、地域行事等の調整、推進の母体となる組織

△校下の文化、体育諸団体

△小学校 PTA、小学校

各団体の活動目標、内容を検討、改善をするための鈴川集会を開催し、活性化へ向けての懇談や紹介ハンドブックの発行をしている。

活動については、地域が主体の行事（祭典、盆踊り、敬老会、親子読書の会等）には、学校が積極的に参加協力し、学校が主体の行事には、地域が積極的に参加協力して一体化した活動が円滑に進められている。

△ふる里を残す運動

PTA 文庫「ななかまど」毎年発行。

VTR、写真、スライドなどの資料の作成保存

△ふる里を語り継ぐ運動

“面白ゼミナール”

開拓の苦労を経験した高齢者をはじめ広く地域に指導者を求め、歴史、産業、交通、生活などについて、児童に学ばせている。社会科、理科の学習に活用し、オペレッタの資料にもなっている。年間6回多様な内容で継続しているほか、百人一首、お手玉、竹馬、七夕の飾り、しめかざり等、昔の遊びや道具づくりの伝承も加えて実施している。

△ふる里を創る、楽しむ、守る運動

“地域の教育力の向上”

後継者の育成、地域の活性化

“楽しい思い出をつくる”

七夕祭、盆踊り、祭典等郷土行事への参加

“自然保護”

やまべ稚魚の尻別川への放流

“文化祭展示”

自主作品の出品、鈴川焼き同好会（らく焼）の展示

(2) 生涯学習の基盤づくり (学校教育)

子どもが喜んで学習し、学校生活を楽しみ、学習の仕方を身につけることは、学校生活を充実させ生きがいを見出していくことになる。このことが生涯にわたって絶えず学ぶ能力をめざすことになり「自己教育力育成」の基礎づくりと関連して、学校教育が生涯学習の基盤づくりとしての位置づけになるもの考える。

① 体力づくりを通して

本町は、昭和55年度、体力づくり優秀組織表彰「内閣総理大臣賞」を受賞、同年、鈴川小学校でも音楽の生活化と体力づくりで「北海道教育実践表彰」を受けている。この伝統を大切に、体力づくりがもつ、合理性、科学性を始め、人づくりに多くの優れた側面の活用は、生涯学習の基盤づくりに最適と考え、継続的に取り組んできている。小規模ながら、陸上競技、マラソン、クロスカントリースキーでは各大会に優秀な成績を収めている。

② オペレッタを通して

昭和55年、全国へき地複式教育研究大会で発表された全校オペレッタは、本校の特色ある教育活動として位置づけられ、その活動は、伝統として継続されている。特に、面白ゼミナールを中心とした取材をもとに、地域素材を生かした創作オペレッタとして、鈴川の歴史、自然、産業等の変遷と人々の生活の変化などを内容としている。

③ 地域の素材や教育力を通して

地域の学校教育、家庭教育、社会教育を広く組織し、一体となって、教育、文化発展向上をめざして取り組んでいるが、その具体的実践として、学校裁量の時間を活用し、年間6回「面白ゼミナール」を開き、地域の先達、専門の方を講師として、体験談や、人間としての生き方に触れた学習を組織し、郷土愛豊かな育成をめざして継続している。

△面白ゼミナールの内容として

ア 鈴川の歴史を学ぶシリーズ

38 特集 生涯学習社会の総合診断

イ 鈴川の産業を学ぶシリーズ

ウ 鈴川の自然を学ぶシリーズ

エ 郷土工芸等を学ぶシリーズ

オ 郷土の人々と楽しむシリーズ

(3) 家庭に語らいを鈴川集会（家庭教育）

① 我が家の教育目標づくり運動

社会生活における家庭の果たす役割を認識し、親はどんな家庭を築いていきたいかの願いや、心得、見通し、手だてなど、家庭の理想像を追求するため、自己の修養に努め、「情」の心を醸成し、人間性豊かな子を育てることを目標として、この運動を提唱、地域ぐるみで子どもの健全育成をはかっている。

② 運動の実践概要

昭和59年度、「我が家の教育目標づくり」の具体化計画を作成、「テレビ休日」と家庭の対話について併せて提唱した。幼・小・中・高生父母会を中心とする「家庭に語らいを鈴川集会」で、映画と懇談を実施した。60年度、アンケートを集約検討、地区児童生徒への呼びかけの文の配布、推進懇談会（家庭に語らいを……）を開発、幼・小・中・高の発達段階に応じた発達課題、学習課題を設定し、各家庭の家風・個性・雰囲気大切にしながら進めている。

③ 実践をふりかえって

鈴川集会は文字通り、家庭・学校・地域が一体となつてとり組む地域活動であり教育長時代に私が最も期待し願ったところのものである。

これらの実践内容はとても限られた枚数の中で紹介しきれものではないが、これまでに述べたように予想以上のすぐれた実践がみられた。学習を中心とする地域の協力もすばらしいものがある。この実践を通じて、あえてことばを連ねるとすれば、やはり地域全体によりわかりやすく実践の方向が理解されるよう努力することにあつたような気がする。いずれにしても学校長を中心とした学校側の努力は大きいものがある。

4. 生涯学習実践とその反省

さて、私が教育長在任中に手がけた「まちぐるみの生涯学習」の実践のほんの一部をとりあげてみたが、まえがきにも述べたように教育長として町内をみていた時と町長になってから見るのとではいろいろな場面でズレがあることに気づく。その意味では多くの市町村の中で、首長あるいは一般行政を担当する部局がどの程度生涯学習に関する認識をもっているかといえはおおよそ想像以上に無関心だということが特定の地域を除いては言えるような気がする。また、市町村の組織機構そのものが教育とは別なものという認識のうえにつくられているということもいえよう。

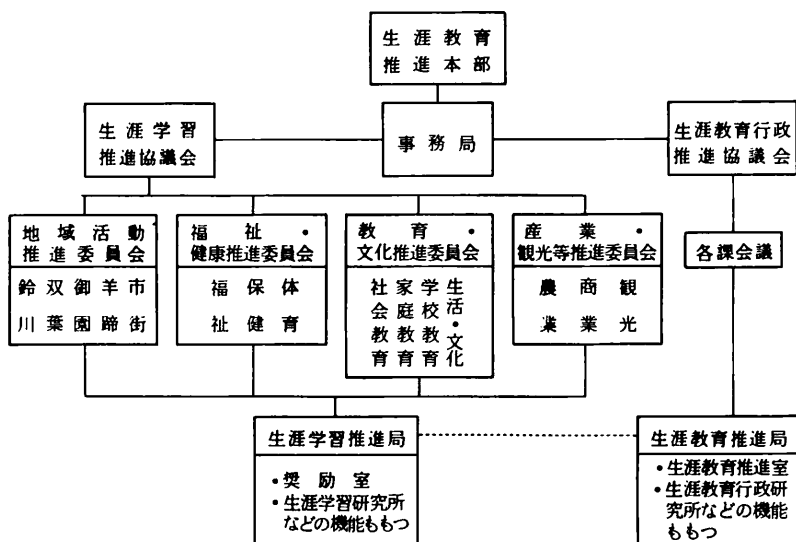
いってみれば、市町村の一般行政は町民の直接的な、あるいは現実的な生活課題を解決することで精いっぱいであり教育的な発想で接近すればする程、それは教育委員会の範ちゅうという理解と認識に立つような気がする。その意味では、かつて、私も見学させていただいた秋田県の生涯教育センターが県と県教委の両方から職員を派遣し総合的な推進体制をとっていることは、改めて、さすが先進地という気がする。

5. 生涯教育推進体制の整備

私が、今考えているのは、町ぐるみの生涯教育推進体制を確立することであり、町教育委員会の諮問に対し、社会教育委員から答申されたものを参考に、菰茂別町民の生涯にわたる学習意欲に応えとともに、継続的な学習の体系化を図り、生涯学習の具体的な実践の充実・深化をめざすため、町生涯教育推進本部を設置したいことである。

これらは、今、教育委員会が窓口となって検討中であるので、ここでは推進体制組織図（案）を紹介するだけにしたい。

図1 喜茂別町生涯教育推進体制組織図(案)



6. まとめ

—生涯学習町づくりへの発展—

改めて述べるまでもないが、「生涯学習町づくり」ということは、いくつかの隘路があるという前に、それ自体がきわめて重要な意味をもつものであることを認識しなければならない。

元来、町長が町政を執行するためには、当然のことながら、予算の審議機関として議会があり議員一人ひとりの生涯学習に対する理解と協力を得ることは大切であり、それ自体が種々の機会の過程を経て認識を深めていくものである。

また、一方、私が教育長時代において、教育委員会職員の生涯学習についての認識、理解を深めることに努め、その成果は大きかったが、町長部局の職員についても同じことがいえるのであり、私は、本年度から町内の

青年・婦人の道外・海外への研修機会を充実すると共に、町職員の道内・道外研修を積極的に進めることとした。このことは、職員の士気高揚につながるばかりでなく、町長の政策を執行し推進するにあたり、一人ひとりが重要な役割を担っていることの認識を深めることともなり、その成果は顕著にあらわれており、今後、生涯学習の推進体制をつくっていくうえにおいても大きく役立つものと思う。

また、過疎化現象が著しい本町は高齢者に比し、若者の数が少ないという状況となっているが、実際には、それを懸念し嘆いてみても人口は増えないし問題解決にはならない。

そこで私は、農・商工青年層の研修を積極的に進めると共に、農業においては、自主的な生産組織の育成、商工青年については、観光開発をはじめとし町づくり活動へととりくみについて協力援助し、また、異業種間の交流・研修に力を入れることにした。

町職員をはじめとし、このような、かなり思いきったとりくみは若者のやる気を起すこととなり、本町の将来展望がみえてきたような気がする。

一方、これらのとりくみを進めながら、今後の方向としては、一般町民の若者に対する信頼の目を養うことと、また、反対に、大人に対し若者が積極的な共通理解の場を設ける等の努力が必要と思われる。

それらを総合する、新しい動きとして注目されるのが、この夏も行われた「じゃがとんまつり」である。即ち、その名が示す如く、本町特産の「じゃがいも」と「豚」を内外に売りこもうという趣旨であり、これを実施するためには、生涯教育セミナーをはじめとし、商工会、観光協会、農業協同組合及び各種農業団体、婦人、青年団体、地区労、町関係者などで協議を重ねてきたものであり、その組織は町長を実行委員長とし6部会、135名により構成されており今後、生涯学習町づくりを一層広げていくうえで有意義な基盤となった。

また、農業生産組織としては、町内の比羅丘、留産地区を主体とする「比羅丘塾」というのがあり、本町の農業が従来のアスパラガス、じゃがいも

42 特集 生涯学習社会の総合診断

等が主体となり、連作の弊害あるいは地力減退、さらには販売ルート等の問題に対処するため、新たに、「長いも」の生産研究にとりくんだものであり、町としてもこれを大きく援助し、その成果は目に見えてきているが、この地区の青壮年が、かねて生涯学習の一環として進めてきた結果として生みだされた意義は大きい。

一方、異業種の青年、即ち、商工、農協、四Hクラブ、町職員組合、青年会議などによる交流やセミナーが開催されて相互に連携を深めるとともに、若者の手による町づくりへのとりくみは一層具体的となっており、過去10年、あまり明るくない話題に終始した本町にも21世紀を目前にようやく曙光がみえはじめたような気がする。

さいごに、本稿は「生涯学習町づくり」ということで、これまでの実践をふまえて述べてきたものであるが、これらをもって、のぞましい生涯学習の姿といえるかどうかは議論のあるところだと思う。

しかし、私としては、町民に生涯学習の重要性や意義を理解してもらい、学習の成果が住民自身の生活向上とともに、町づくりに裨益するところとなれば、それなりに意義はあるものと考えており、いよいよこれからが正念場だと思っているので、いずれ機会をみて、それらの実践を紹介したいものと思う。

参考資料

「まちぐるみの生涯学習」昭和63年1月30日

喜茂別町教育委員会